

「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」に基づく取組状況について

- ・市民創発の定義に記載されている「団体」の数について

市内には様々な団体が存在しておりますので、総数につきましては不明ですが、コミュニティ推進部が所管している団体数につきましては、次のとおりです。

○団体数

町内会・自治会	650 団体
NPO 法人	381 法人

- ・「まちのひろば」関連の令和2年度の予算について

2,504,000 円

(普及啓発イベント「まちのひろばフェス」実施や「まちのひろば」の啓発冊子の作成など)

- ・令和2年度まちのひろば創出職員プロジェクト報告書

別紙参照

令和2年度 まちのひろば創出 職員プロジェクト 報告書



目次

令和2年度「まちのひろば」創出職員プロジェクトチームの取組について	1
【1班】防災空地で地域交流「Oda petit marche」	4
【2班】NEC 公開空地を活用した「まちのひろば」の創出について	7
【3班】幸区におけるコミュニティガーデンの創出について	12

令和2年度 「まちのひろば」創出職員プロジェクトチームの取組について



プロジェクトチームメンバー

職員プロジェクトチームとは

本市は、暮らしを取り巻く社会環境の変化を見据え、市民一人ひとりが多様なつながりをつくり、自分らしく幸せに暮らせる地域社会の実現を目指して、平成31（2019）年3月に「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」（以下「基本的考え方」という。）を策定し、地域レベルの新たなしくみとして、多様なつながりを育み、誰もが気軽に集える出会いの場として、多様な地域資源を活用した地域の居場所を「まちのひろば」と名付けて創出していくこととしています。

この取組を推進していくためには、行政としても、公共施設の地域化、民間資源の活用推進及び「まちのひろば」の自主性や自律性を尊重した支援などを進めるとともに、「市民創発」がもたらす様々な変化や動きに呼応することが求められていることから、職員の意識改革と人材育成が必要です。

こうしたことから、職員参加と意識改革の推進及び「まちのひろば」の見える化を目的に、職員自らが地域に出て「まちのひろば」のモデルを実践していく、これまでにない庁内横断型のプロジェクトチームを、令和元年度に新たに設置し、通常業務プラスアルファの業務であるにもかかわらず、6職種20名の職員がメンバーとして集まり、地域の方など多様な主体と連携しながら多くのモデル実践を行い、新たな「まちのひろば」を生み出しました。

このような中、年度末に新型コロナウイルス感染症（以下、「新型コロナ」という。）の感染拡大が起りましたが、翌令和2年度については、このような状況だからこそチャレンジできる取組内容を検

討して進めていきました。

新たな課題を踏まえた取組

新型コロナの感染拡大により、これまでと同様の手法で顔を合わせて集うことが難しくなり、「新しい生活様式」に対応した「まちのひろば」づくりの必要性が求められることとなったことから、令和2年度については、新しい取組を行うのではなく、令和元年度の取組を深化させながら、「新しい生活様式」に対応した新たな居場所やつながりづくりを実践していくこととし、テーマを「まちのひろば with 新しい生活様式」の創出としました。

令和元年度の取組の中で継続実施する2つの取組（小田の防災空地、向河原の公開空地）を中心に、新しい生活様式に対応した「まちのひろば」づくりを実践することとし、昨年度からの継続メンバーを含めた4職種15名が3グループに分かれて活動することになりました。

新たな取組として、働き方改革や職員の人材育成の観点から勤務時間外に自主的な活動として参加できるサポートメンバーを募集し、集まった8名のサポートメンバーも可能な範囲で取組に参加してもらうことになりました。

なお、関係者との打ち合わせはできる限りオンラインも活用して行う、イベント開催時は当日検温や手指消毒を徹底するなど、感染対策を徹底して活動してきました。



オンライン打ち合わせの様子

研修を織り交ぜた全体会など

昨年度の取組を継続実施する2グループと新たなメンバー中心の1グループの計3グループでモデル実践に向けた取組を進めることとなりました

が、他グループの情報共有やグループを越えたディスカッションを目的として、メンバー全員が参加する全体会を昨年度同様に適宜開催することとし、その内容についてはモデルの実践に生かせるものとなるように工夫を凝らしました。

第1回の全体会は、新型コロナの影響で7月の開催となりました。キックオフ会として、昨年度の取組報告とあわせて自由交流なども設け、メンバー間の交流を深める有意義な時間となりました。

9月に開催した第2回の全体会では、「日本一おかしな公務員」の著書でもある、塩尻市役所の山田崇さんによる「チャレンジする人材育成セミナー（オンライン）」と連続開催で行いました。

セミナーでは、単に講義を受けるだけではなく、講義を基に自分ができるアクションを考えるワークも設計し、プロジェクトチームの取組へ生かすことができる内容を意識しました。



チャレンジする人材育成セミナー（第2回全体会）

12月に開催した第3回の全体会は、場を編む人藤本遼さんと尼崎市役所の江上昇さんによる協働・連携研修「with コロナ時代の「まちのひろば」づくりを考える（オンライン）」と連続開催で行いました。



協働・連携研修（第3回全体会）

3月には、最終報告会として第4回の全体会を開催しました。なお、報告会の様子はYouTubeの「川崎市コミュニティチャンネル」に公開される予定となっています。

新型コロナの影響でイベントの開催が難しい状況でしたが、11月には、「まちのひろば」の市民向け普及啓発イベントである「まちのひろばフェス2020」に一部のメンバーがオンライン参加し、活動の中間報告をするとともに、コロナ禍のつながりづくりについて、他の参加者とディスカッションを行いました。



まちのひろばフェスの様子（左上がプロジェクトチーム）

取組を通じて

令和2年度は、新型コロナの影響によりキックオフも遅れ、短い期間で活動していくことになった中でも新しい生活様式に沿った「まちのひろば」のモデル実践を行うことができました。

これらの取組は新たに広報紙や YouTube 動画などを活用して、庁内外に周知をしてきましたが、更に活動の見える化は進めていく必要があると考えています。



広報紙『かわら版』



広報紙 QR コード

新たに設けたサポートメンバーについては、コロナ禍の影響もあり、各グループの取組への参加は決

して多くはありませんでしたが、オフサイトミーティングによる交流やグループの取組への参加など新たな動きをつくるきっかけになりました。



サポートメンバーの活動
(左 オフサイトミーティング、右 朝活への参加)

前例がない活動を一からつくり、令和元年度から続く困難な社会状況の中でできることを試行錯誤した令和2年度の活動でした。メンバー及び地域をはじめとした様々な方の地域への想いや新しい発想などによって生まれた「まちのひろば」を庁内外の方々に知ってもらうとともに、身近に感じてもらえたのではないかと思います。

令和3年度は、本年度の活動から学んだ課題への対応はもちろんのこと、長引くコロナ禍においても更に職員の意識改革を進めていくプロジェクトとして、取組を推進していきたいと思ひます。

【1班】防災空地で地域交流「Oda petit marche」

メンバー

市民文化局区政推進課 鈴木 真
市民文化局区政推進課 鈴木 信成
健康福祉局感染症対策課 樋口 聖恵
まちづくり局都市計画課 伊東 左江子
川崎区役所企画課 津金 孝一
幸区役所企画課 田邊 寛隆
市民文化局協働・連携推進課 前田 明日香

昨年度の振り返りと方向性

まちのひろば創出職員プロジェクトチーム1班は、市民文化局、健康福祉局、まちづくり局、区役所といった様々な所属と薬剤師、建築職といった異なる専門職種のメンバーで構成され、防災空地での地域交流をテーマに活動するチームです。令和元年度にチームを結成し、令和2年度は、新たに川崎区役所のメンバーも加わりました。

1年目の取組では、小田地区の防災空地を拠点とし、街中のレトロな雰囲気を活かした『小田らんたん横丁』を開催し、イベント内でのオープンワークショップやイベント後にも町内アンケートを取る中で、防災空地の活用ニーズを探ってきました。



その中で、活用の主体をなるべく幅広い方々にお願したいという考えに基づき、3月末に防災空地でのイベントづくりワークショップを企画しました。ワークショップ自体は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催を見送る形となりましたが、近隣のマンションに住む方からワークショップ参加の申し込みがありました。

ここで、小田地区の特徴を再度見直してみると、小田地区自体は木造の建物が密集しており、町内会の方々も長く住んでいる方が多く、比較的年齢層が高めの方が多い地域になります。一方で、小田地区を取り巻くマンション群については、築年数が浅いものもあり、小学生のお子さんを持つファミリー層が多いのが特徴です。ただし、マンションに住む

方々は、近隣に大型のショッピングセンターがあるため、小田栄の駅を中心に住民同士の行き来があまり感じられないという印象がありました。

そこで、2年目に開催するイベントについては、周辺のマンション群も対象にし、ファミリー層、特に小学生の子どもがいる女性をテーマに開催してみてもどうかという考えが浮かんだこと、偶然にもマルシェを開催してみたいという方が見つかったことにより、その方々を主体にイベントを開催してみることにしました。

打ち合わせはオンラインで

今回マルシェの主催を引き受けてくれたのが、小学生の子どもがいる2人の女性でした。新型コロナが広がる中、子どもが通う小学校においても、できる限り人との接触を少なくすることが求められており、また、子育て中であることから、限られた時間の中で、打ち合わせを進める必要がありました。

そのため、町内会の方や職員プロジェクトメンバーとの顔合わせを除いて、イベントの打ち合わせのほとんどをオンラインで開催しました。初めのイベントのコンセプト作りなどは、オンラインであるがゆえに、2～3回かけて特に丁寧に言い、それぞれが大切にしているなどを共有しながら、イベントのイメージを作り上げて行くことにしました。



オンライン打ち合わせの様子

子育て中のお母さんにとって買いたいものが揃っているけれども、子どものためだけではなく、お母さん自身が楽しめるものは何か。そのようなターゲット層が関心を持つ内容を追求した結果、イベントの雰囲気も1年目のレトロなものではない小さなマルシェを開催することにしました。

Oda petit marche

小田の防災空地は、木造建築物が密集する住宅街

の中に火災時の延焼止めなどを目的に設けられた小さな空き地です。マルシェを開催することとしても、一般的な2m×2mのテントが6～7つほどしか入らないため、少し可愛らしい小さなマルシェをイメージして、イベント名を『Oda petit marche』と名付けました。

数店舗しか出店できないマルシェであることと、まだ実績のないマルシェであることから、出店の声かけをする店舗に偏りがなく、ターゲットに興味をひく組み合わせとなるよう、また、マルシェだけにとどまらず、この街に何か関わりを持ってもらうきっかけとなるようなオーナーを、などいくつかの視点を重視しながら、声かけを進めました。

また、新型コロナの感染症拡大により遠方へ出かけられなくなったこともあり、街中に非日常の楽しみを生み出すことを意識しました。

最終的に飲食3店舗、物販5店舗で、ラインナップもコーヒー、クラフトビール、カレー、野菜、イラストレーターグッズ、アクセサリ、お花屋さん、陶芸など、偏りがなく、多様な好みに応えられ、かつ、日常を少し楽しく彩ってくれるものを揃えることができました。



『Oda petit marche』チラシ

イベントをイメージして、チラシには、『慣れ親しんだ小田のまちで いつもと違う週末を』というキャッチフレーズを載せ、イベントを作っていく上で大切に感じた、身近な地域で自分たちの力で楽しめるコンテンツを生み出すことを強調し、広報を行いました。

そして、迎えた当日

朝10時からの開始にもかかわらず、開催前から並ぶ人の列ができました。イベントが始まると、野

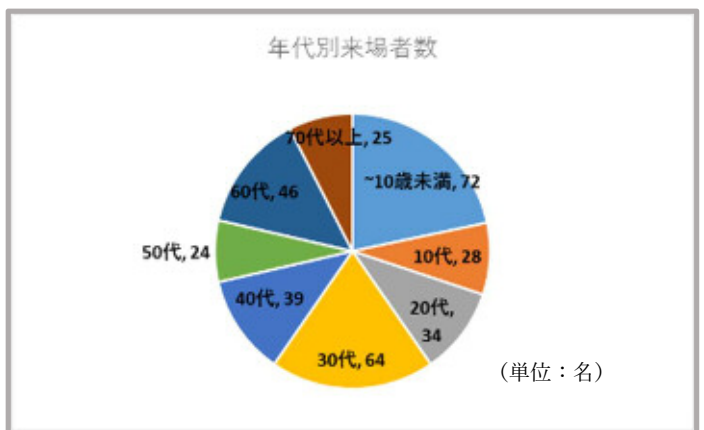
菜を買いに来た人、コーヒーを買いに来た人、その他の目的を持って来た人も、他の店舗を順繰りと周りながら、お昼すぎの時間帯を除いて、満遍なく人が訪れました。カレー店は午前中に売り切れる等、どの出店ブースも大盛況でした。



『Oda petit marche』当日の様子

来場される方も、女性がやや多めではあるものの家族連れや男性の方も多く見られ、幅広い世代の関心を集めることができたように思います。

イベント中に、来場者のチェックや、ヒアリング調査を行い、どのような方が来場していたかを把握することにしましたが、その結果は下記の図の通りです。



図から、30代と10歳未満の来場者を中心に多世代の方が来場していることがわかります。図にはありませんが、全体として女性の来場者数が多いことから、ターゲットにしていた子育て世代の女性の来場につながったことで、イベント当初に掲げた目標を概ね達成できました。総来場者数は、400名弱であり、感染症拡大防止の観点から、今回は声かけをできなかった近隣町内会の

方にも声かけができれば、より多くの来場者が見込めるのではないかと感じました。



アットホームな雰囲気の会場

また、副次的な効果としては、イベント会場が大きくなかったこともあり、アットホームな雰囲気が生まれ、出店者同士の交流も見ることができました。その結果として、出店者の方へのアンケートにおいては、次回も参加したいという回答が100%となりました。想定以上の収益を上げることもでき、実績のないイベントに参加してくれた出店者の方へ還元ができたことも定期的な開催に繋げていくための大切な一歩になると考えています。

2年間の活動を通じて

今回のイベント開催を最後に職員プロジェクトチーム1班としての活動は一旦終わりとなりますが、今後もマルシェの主催をしてくれた方々と共に、プライベートでの活動を続けていく予定です。

2年間の活動を通じて、町内会の方々とつながり、町内会の活動がより身近に感じられたこと、町内会の役員の方々とマルシェを主催した方々とのつながりづくりに貢献できたこと、それらを通じて、地域交流を図ることができたことは、行政職員として、とても貴重な経験だったと思います。行政の一つの役割として、人がつながる場を作るということの重要性を感じました。

また、プロジェクトを実行に移していく上での活動は、とても地道なことを着実にこなしていくことであり、それをいかに負担なく分担するかが、継続していけるかの鍵となることも学びました。今回開催したマルシェも単発のイベントでしかなく、継続実施していくためには、より多く関心を持ってもら

えるファンを増やしていくことが大切な段階にあります。イベントの開催にとどまらず、街中に定着する何かを生み出していくという視点を忘れず、継続できる仕組みを、この縁を活かして、引き続き模索していきたいと思います。

【2班】NEC 公開空地を活用した「まちのひろば」の創出について

メンバー

経済労働局イノベーション推進室 藤本 絢
 まちづくり局都市計画課 伊東 左江子
 中原区役所企画課 田中 直樹
 中原区役所地域ケア推進課 工藤 青人
 宮前区役所企画課 山田 将史
 市民文化局協働・連携推進課 宮下 拓

取組の趣旨・目的

2班では、昨年度、地域と企業と一緒に NEC 公開空地を活用した「まちのひろば」のモデル実践を進めてきました。1年間の取組を通じて、地域の新たなつながりをつくり出すことができ、地域にとって今まで活用されない「もったいない空間」であった公開空地を活用することで、「こんなこともできるんだ」という可能性を地域・企業・行政の3者が認識することができました。しかしながら、モデル実践当日は悪天候により室内での実施となり、公開空地の活用に限っては行うことはできませんでした。

そのような中で、メンバー、そして関わってき方々からもう一年度、地域と NEC と我々で共に小さな取組を積み重ねて、持続的に活用していく体制構築に向けた取組を進めていきたいという声を受け、本年度も継続することとなりました。

令和2年度の方向性～公開空地の地域化～

「民間敷地である公開空地が地域活動の場として活用されることが地域活性化につながる」という仮説のもと、NEC 玉川事業場公開空地において、敷地所有者、地域関係者と連携して実証実験を行い、活用の可能性、課題及び望ましい運営体制を探りました。

見出しにある「公開空地の地域化」とは、民間敷地である公開空地にて、地域の「やりたい」活動が行われる場として活用できるようになることと2班で位置付けて決めたテーマとなっています。



すぐには難しいですが、イベント等の試行的活用を積み重ねることにより、公開空地の利用ルールが少しずつ明確化され、最終的に地域による日常利用につながるということが「まちのひろば」の創出になるという目的意識をもって取組を進めました。

取組の内容

【宇宙授業】

開催日時：令和2年5月23日

取組概要：

年度当初はコロナ禍との闘いでした。緊急事態宣言下で職員プロジェクトもスタートできず、歯がゆい気持ちの中、できることを模索していました。

そのような中で、玉川中学校区地域教育会議からオンライン授業開催に向けての協力依頼があり、職員プロジェクトと NEC の有志メンバーで運営補助の協力をしました。宇宙教育リーダーの和田直樹さんによる「宇宙授業」は、当時、学校の休校期間ということもあり、参加が抽選になるほどの大人気となりました。オンライン上でしたが、子どもたちが楽しんで学習している姿を見ることができ、直接会えない中でも、つながることができる新たな形のお手伝いを裏方としてすることができました。

今だからできることとして、公開空地の活用ではありませんが、今後の取組をつなげていくためのスピノフ的な位置づけとして、地域を盛り上げることができました。



「宇宙授業」運営メンバー

【ラジオ体操・ヨガ】

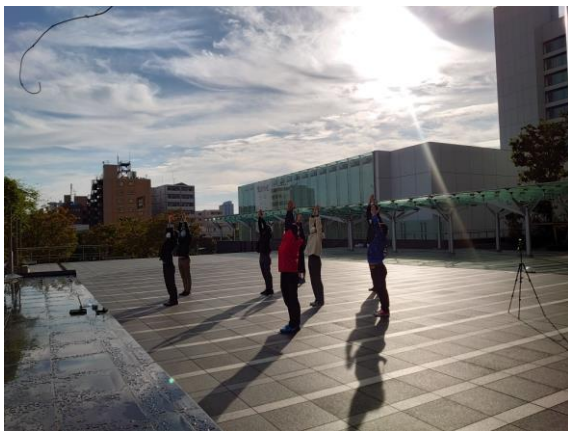
開催日時：令和2年10月26日、11月16日、
26日 午前7時30分～

取組概要：

ラジオ体操15分、立ちヨガ15分で実施しました。職員プロジェクトが主体となり、現在の公開空地利用ルールの範囲内で、実施し、公開空地内の各エリアで、利用者目線でその魅力や課題を確認しました。



公開空地入口付近で実施



公開空地2階部分で実施

●参加者からの意見

- ・どのエリアも体操等を行うには十分なスペースがあり、10～20人程度で様々な活用ができると感じた。
- ・気候の影響をダイレクトに受けるので、活用に向いているのは暖かく、気候が安定している時期ではないか。
- ・音はラジオ体操（数人向けに10メートル程度まで届く音量）の範囲であれば、周囲への影響はほぼないと感じた。

●課題

- ・実施日は適温（10℃前後）かつ好天であったが、気候によっては快適ではない。
- ・声かけをしたが、地域の方の参加がほとんどなかった（今後、声かけの仕方も検討が必要）。
- ・自由参加とした場合に、悪天候時の中止連絡方法
- ・オンラインで開催する場合は電源があった方がよい（利用ルールの範囲外となる）。
- ・広いスペースのため通りすがりの人は気軽に参加しにくい。

【パンジー体操】

開催日時：令和2年11月16日、26日

取組概要：

中原区のご当地体操「なかはらパンジー体操」のリニューアル動画の撮影を行いました。

この取組は、中原区社会福祉協議会を通じ、NECの玉川プロボノ倶楽部「PNG48」が企画から編集まで、全面的に協力する形で行われました。

16日はJR横須賀線側の空地にて、26日は向河原駅側の空地（1、2階）にて撮影を実施し、撮影に参加した地域のボランティア「パンジー隊」に空地に関する意見聴取を行いました。

●パンジー隊からの意見

- ・開放感があり、素敵な場所でした。
- ・公開空地があることを知らなかった。
- ・知ってもらうためにちょっとしたイベントをやったらどうか。このようないい場所を活用しないのはもったいない。
- ・子どもや高齢者が近場で飲食を伴う、憩いの場所が欲しいと思っていた。この場所は身体を動かし、おしゃべりができる広場になる。



1日目はJR横須賀線側の空地で実施

●課題

- ・撮影時は、天候に恵まれたものの、定例的に体操教室として活用する場合には天候の問題がある。
- ・トイレ利用など、施設管理の観点から、体操教室など、小規模の取組を行う際にも、完全にお任せで実施してもらうことは難しい。

●空地の活用から地域の健康づくりへ

取組を通じて、関連動画9本（体操動画6本、メイキング2本、PR動画1本）が制作され、中原区のホームページに掲載されており、市政だより令和3年4月1日号（区版）やタウンニュース、区発行のチラシにより、地域住民に周知されています。



区の該当ページ

【ほしぞらディスコ】

開催日時：令和2年12月17日

取組概要：

地域の取組が融合された活用の検証や公開空地でルールを越えた活用の検証として、NEC及び川崎市のポッチャ部、ほしぞらディスコを主催する「大師 ONE 博」や、近隣のヨガスタジオ、和灯り・キャンドルアーティストの方と連携し、関係者限定で様々な使い方のトライアルを行いました。当日は、運営者を合わせて45人が参加しました。



サイレントディスコ×ZUMBA®の様子

実施内容：関係者

- ・サイレントディスコ：大師 one 博
- ・サイレントディスコ×ZUMBA®：studio TRENDY（サイレントディスコ×ハンモックヨガ）
※協力 手作りあかり教室 Lumiavenir、キャンドルアーティスト「ME TIME CANDLE」
- ・終了後に参加者及び主催者へアンケートを実施

NECの協力を得て、複数の電源を使用できたことや机などの什器を借りられたことで、無事イベントを実施でき、コロナ禍においても外の会場で広々と活動できたことで、イベント会場としてのポテンシャルを感じることができました。

●参加者からの意見

- ・障害物のない広い屋外で体があつりと動かすことができ、気持ち良く楽しかった。

●課題

- ・NECの敷地であることが明らかであるため入りにくさがある。
- ・夜間イベントの際は夜間照明等が必要。
- ・イベントを行う上で公開空地の管理方法や利用手続き・基準などが不明確である。



ハンモックヨガ×和灯りキャンドルの様子

取組を通じて

2年間の取組を通じて以下の成果が得られました。

1点目として、多くの地域の方に関わってもらいながら、空地のポテンシャルの高さを共有することができました。令和元年度のしもぬまべこどもナイトに続き、令和2年度に朝活、ほしぞらデ

イスコ等を行ってきた中で、「こんな素敵な場所が地域にあることを知らなかった」、「休日に散歩してみたい」、「イベント会場としてのポテンシャルを感じた」、「コロナ禍で密にならない空間として地域活性化に活用していきたい」等の声がありました。地域の方などから公開空地を活用したいという声が増え、現在も次の活用に向けた検討が進められており、公開空地を活用するプレイヤーの輪が徐々に広がっています。

2点目として、場所の提供にとどまらない「NECが保有していること」の価値を認識することができました。

活用の検討を進める中で、前向きに活動に関わっていただけるNEC社員の方に出会い、思いを共有しながら一緒に取り組んでいただきました。NEC社員の方の動画撮影等の技術や、地域の方を笑顔にするファシリテーション力により、この公開空地でしか実現できない取組となり、地域の方の共感や感謝など、大きな反響が生まれました。賃貸のオフィスビルや商業ビル等の公開空地にはない大きな強みを引き出したことは、この取組の大きな成果と考えています。

3点目として、活用を通じてNEC、地域のプレイヤー、行政がつながり、それぞれのWINに繋がる芽が出始めていることです。

中原区役所の会議にて後藤先生(東海大学工学部特任准教授)から取組に関して「コロナ禍でワクワクできることがあるのが大きい。それを作り出す取組・場所があるのは中原区の大きな資源」というコメントをいただく等、行政側の取組の意義に対する認識が高まりつつあります。また、取組をきっかけにNECの新規事業検討として中原区の福祉の現状のヒアリングを受けるなど、双方向の新たな接点が生まれており、継続的にこの取組に関わることへのNEC・行政双方の機運を高めることができました。

一方で、課題としては、公開空地の利用ルールや利用許可の流れが明確になっておらず、外部からはわかりづらいことが挙げられます。

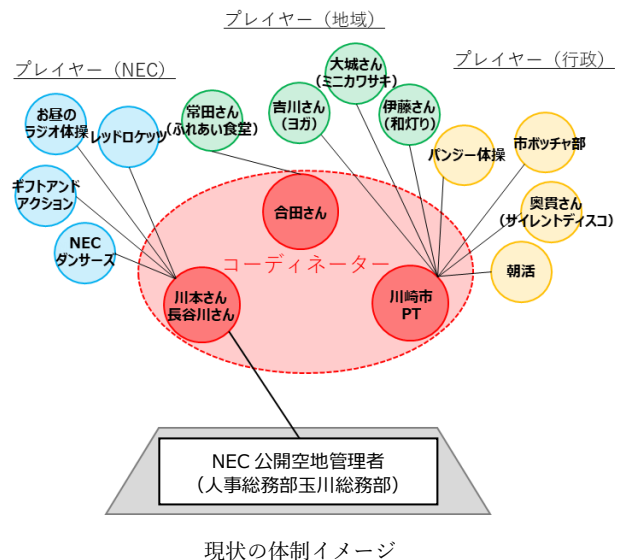
今後、公開空地をさらに積極的に活用し、この意義の大きな取組を発展させていくためには、公開空地の利用ルール等の整理が重要であると考

えます。そのため、今後は、職員プロジェクトチームの活動から庁内関係部署が連携した定常・発展的な取組へとステップアップし、試行実施を継続しながら、利用ルール等の検証を進めていきます。

今後の取り組みについて

●活用促進に向けた課題について

2年間の職員プロジェクトにおけるNEC公開空地の活用にあたっては、NEC側のキープレイヤー及び職員プロジェクトが地域のプレイヤーをつないだ上で、1件ごとにNEC人事総務部玉川総務部に確認する形をとってきました。



取組を通じて、利用ルールの枠が見えてきており(雨天時の屋内利用可、セキュリティラインを超えないようホールのトイレを活用など)、その枠を徐々に広げていこうという動きがあるものの、現時点ではルールや利用許可の流れが明確になっておらず、外部の人間からするとわかりづらいという課題があります。

そのため、令和3年3月にNECに2年間の活動内容を報告するとともに職員プロジェクト終了の体制について協議を行い、以下の体制で試行を積み重ねながら、利用ルールを整理し、今後の積極的な活用につなげていくことで合意しました。

●職員プロジェクト終了後の体制について

【NEC】

これまで通り、社内キープレイヤーが関与し、

地域のプレイヤーや社内プロボノとのつながりを行う他、人事総務部玉川総務部の関与をより高めるなど、公開空地の活用に向けた体制を整えていきます。

【職員プロジェクト】

職員プロジェクトのサポートメンバー制度を活用し、任意メンバーの自主活動として可能な範囲で活動に関わります。

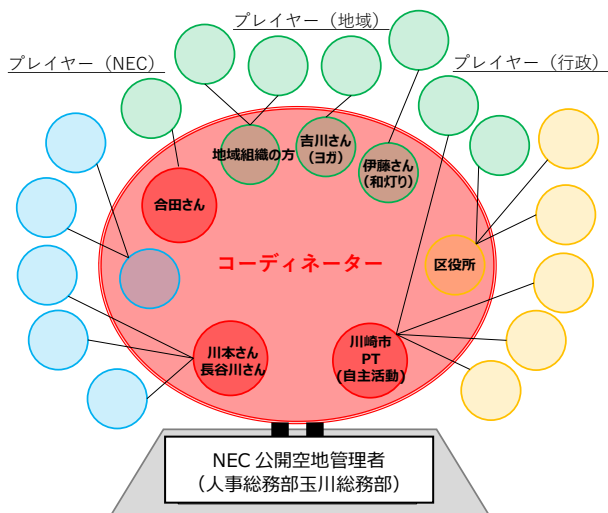
【行政】

地域施策として、中原区役所が中心となり、市役所各課とのマッチング、市役所・区役所事業での活用の検討、区内のニーズをつなぐなど、地域と NEC 間の調整役として関わります。

協働・連携推進課としても、上記の役割のほか、引き続き取組の広報及び公開空地の活用事例として市内への展開を行っていきます。

●将来に向けて

取組の目的である公開空地の日常利用に向けては、引き続き、試行を積み重ねながら、取組に関わった地域のプレイヤーにも活用やルール検討の議論に加わってもらい、将来的には地域のプレイヤーも含め、様々な主体が本空地活用のコーディネーターとしての役割を持っていくことが期待されます。



将来に向けた体制イメージ

その中で、行政としては、取組及び検討をサポートし、本事例を民間敷地において「まちのひろば」をつくっていく際のルール作りや伴走支援の一つの事例として展開していくことが今後のま

ちのひろばづくりにつながっていくものと考えています。

【3班】幸区におけるコミュニティガーデンの創出について

メンバー

こども未来局監査担当	児玉 大樹
幸区役所地域振興課	安川 一代
議会局庶務課	松田 玲奈
市民文化局協働・連携推進課	前田 明日香
市民文化局協働・連携推進課	宮下 拓
幸区役所企画課	田邊 寛隆 (オブザーバー)

幸区でのヒアリング

3班は、令和2年度からプロジェクトに参加した職員が中心のチームで、メンバーの業務のつながりを活かし「幸区」を拠点に活動を行いました。

今年度の活動の特徴としては、新型コロナの感染拡大の影響があることから、新しい生活様式を踏まえた上で実施可能な取組を検討する必要性がありました。

「幸区」をフィールドと決めた後、まずは事務局のつながりなどから、数名の地域のキーパーソンの方に話しを伺い、地域のニーズを把握することとしました。

- 一般社団法人グローバル文化協働支援センター
GCCSC 理事長/JDS グローバルスクール代表
黒江 乃理子 さん

黒江さんは、自身が運営している幸区内のベトナム料理店で、3年前から月1回、地域の方から提供いただいた食材を使用して子ども食堂を開いており、そこではボランティアの方が子ども向けに絵を教えることや紙芝居を行っています。

コロナ禍で店内での活動ができなくなりましたが、令和2年3月は、普段からつながりのある地域の事業者からの協力により、お弁当での子ども食堂を毎日開いたとのことでした。

お弁当の提供は通常時より仕込み時間がかかるため、参加できるボランティアは働く世代よりも年配の方が多く、新型コロナを懸念していたとのことですが、ボランティアにとっても子ども食堂での活動が「居場所」になっていると聞き継続したとのこ

とです。

黒江さんの取組は、子どもたちだけでなく、リモートワークでお弁当を求める方や、ボランティアで働く人にとっても「地域の居場所」となっており、コロナ禍において、新たに活動を模索する3班としては、非常に励みになりました。

- 新岩城菓子舗 3代目女将 徳植 由美子 さん
新岩城菓子舗は幸区にある和菓子店で、3代目女将の徳植さんは、駅前の大規模商業施設オープンに伴い商店街に影響が出る中で、お客様との絆や様々なアイデアで困難を乗り越えてきました。

SNSの積極的な活用や、オリジナル顔はめパネルの作成、サイクリスト向けのサイクルラックを設置するなど様々な取組を行っています。

コロナ禍でお話を聞いた際は時短営業をしており、お祭り等が中止となったため地域イベントの受注もなくなりましたが、こんな時だからこそとどら焼きのデコレーション企画など、新たな取り組みで売上を維持しているとのことでした。

徳植さんのお客様とのつながりを非常に大事にする姿勢や、様々なアイデアをまず「やってみる」精神は見習うべきものであると感じました。

- 新川崎タウンカフェ

株式会社イータウン代表取締役 斎藤 保 さん
新川崎タウンカフェ店長 岩川 舞 さん

新川崎タウンカフェは、鹿島田駅近くに位置するコミュニティカフェで、令和3年1月には幸区のソーシャルデザインセンター「まちのおと」がカフェ内にオープンしました。同じく鹿島田駅近くに位置する鹿島田 DAYS コワーキングカフェとともに、近隣の商店街、町内会及び企業など地域との関わりをもちながら運営をされています。

コロナ禍で地域のイベントが軒並み中止となっており、子どもたちのために何かやりたいという町内会等と一緒にハロウィンイベント実施し、かかし飾り付けなどを行ったとのことでした。

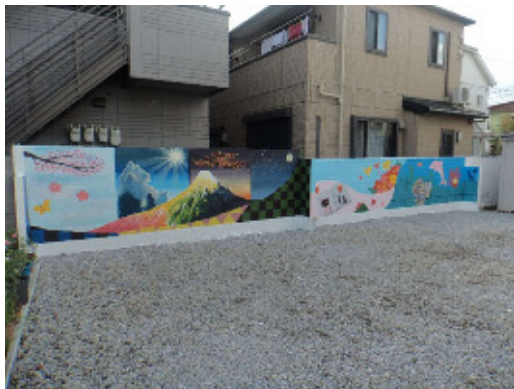
地域とのつながりができるまでのプロセスや関わり方のスタンスなど、これからモデル実践にチャレンジする3班にとって貴重な体験談を伺うことができました。

●小向町内会 田中会長

小向町内会では、令和2年度までまちづくり局とともに防災まちづくりの取組を実施してきました。周辺施設の協力を得て町内の避難経路を確保するほか、会長宅と隣接する敷地を新しく防災空地にするなど、田中会長を中心として積極的に防災に取り組んでいます。

また、会長宅隣の防災空地では、令和2年夏に川崎総合科学高等学校・美術部の生徒による壁画アートの作成が行われました。

このように、地域の学校と独自のつながりを築いている小向町内会は、メンバーにとって非常に魅力的に映りました。



小向防災空地の壁画アート

幸区内で、企業や町内会など多様なキーパーソンからお話を聞いた私たちは、まずは「魅力的な場所」があり、用途も広がりそうな小向町内会の防災空地において「まちのひろば」の実践活動にチャレンジすることとしました。

コミュニティガーデンの創出

小向町内会の防災空地は、看板やベンチ、プランター等が設置されており、今後地域の人が自由に入りし、防災空地に親しみを持ってもらえるよう田中会長自らが環境整備を行っています。

防災空地は、町内で火災等が発生した時に一時的に避難できる空地ですが、いざという時に避難してもらうためには日頃から避難してもよい場所として認知される必要があります。

また、田中会長から、「夏の暑い日に、高校生の壁画を見ながら、ベンチで休憩している子ども連れがいた。ああいう姿を見ると壁画も作って良かったと思う。空地にふらっと入ってきてくれるといいな」

というお話もあり、防災空地の認知度を上げ、地域の人が立ち寄るきっかけになるような花植えイベントを実施したいと考えました。

田中会長からプランターの花への水やりは少し大変に感じていると聞き、防災空地に憩いに来た人が花のお世話をできると良いのではという発想から、花と野菜を育てる小さなコミュニティガーデンを創出する案を考えました。

コミュニティガーデンとは、地域の人が協力して、花や野菜などの緑を育てるを通じ、つながりややすらぎを生み出そうとするもので、市民農園に近い存在です。

イベントの実現に向けて

コロナ禍で、大人数が密になって集まるイベントの実施は難しいため、花植えの際にも少人数制の実施や入れ替え制での実施を検討しました。

参加人数は少なくなりますが、その後の成長の見守りを通して、イベントで一緒にならなかった人やふらっと空地に立ち寄った人とのつながりが生まれるように、防災空地に「伝言板」を設置してはどうかというアイデアが生まれました。

同時に地域との調整を進め、まずは田中会長にアイデアの草案を話し、町内会の定例会に諮ることとなりましたが、感染拡大に伴い町内会は会議を一時中止しており、少し様子を見て2月の役員会に出席し、3月のイベント実施を目指すこととなりました。

イベント実施に向けた一番の課題としては、メンバーに花植えの専門知識がなく、限られた予算の中で花苗や必要物品の調達をする必要があったということです。そこで、専門知識を持ち、過去に業務で小向町内会と関わりのあった建設緑政局みどりの保全整備課の清田職員にアドバイスをもらうこととしました。



みどりの保全整備課へのヒアリングの様子

清田職員からは、花植えのコツ、必要な道具、育てやすい環境など必要な知識を教わったほか、小向町内会の公園管理運営協議会の情報を聞きました。

小向町内会の公園は、公園管理運営協議会という地域の方で構成される団体によって清掃や植栽の管理が行われており、田中会長に企画提案をした際にも、協議会から防災空地の花の管理に協力する旨の提案があった、と話がありました。

清田職員は、公園整備の際に協議会とも関わりがあり、「協議会に花植えの講師を頼んでみるのもよいのでは」というアイデアをもらったことから、コロナ禍で遊ぶ機会の減った地域の子どもたちと、高齢の参加者の多い協議会の、多世代交流ができる可能性があると考えました。

これらの調整を踏まえて具体的な企画検討を進めていきました。



企画案のチラシ

しかしながら、12月下旬から2度目の緊急事態宣言が発出され、町内会の役員会等も全て中止となったため、田中会長から「年度内にイベントはできない」と判断がなされました。

改めて、3班として何ができるかを話し合ったところ、コミュニティガーデンによる間接的なつながり作りという企画案を、小さくても場所を変えて実現させたいという想いに至り、地域のキーパーソンとしてヒアリングを行った新川崎タウンカフェに相談に行きました。

新たなイベントの実現に向けて

新川崎タウンカフェ店長の岩川さんは、花屋で働いていた経験があり、時期的に育成可能な花や、近隣の花植えができそうな候補地をいくつか提案してくださいました。

その中の一つ、「鹿島田駅前交通広場」は、鹿島田駅すぐの場所にある小さな街路樹のスペースで、幸区役所道路公園センターの管理下にあります。

小さなスペースながら、これまで新川崎タウンカフェや鹿島田 DAYS と近隣町内会・商店街等が一緒になってハロウィンやクリスマス用のデコレーションに利用した実績があり、岩川さんは、それらのイベントの実績からも「交通広場」に対する地域の関心が高まっていると感じているとのことでした。

また、折しも相談をした数週後の3月13日(土)に市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室が鹿島田駅近くでイベントを実施し、鹿島田 DAYS もそのイベントに出展予定とのことでした。

小向町内会での実施が不透明となり、「場所」と「タイミング」を求めている3班にとっては、絶好の機会であり、「交通広場」の利用に関する地域の思いを聞いたことから、オリンピック・パラリンピック推進室主催のイベントに参加する形で改めてイベントの実現に向け調整を進めました。



鹿島田駅前交通広場

まず、オリンピック・パラリンピック推進室に出展のお願いをしたところ、快諾いただき、さらに周辺町内会からの出展もあるとのこと、地域との交流が進むのではと考えました。

次に「交通広場」の利用について、管理者である幸区道路公園センターと調整し、イベントまで時間がない中で、今回の企画の趣旨が「地域コミュニティに寄与するもの」であると柔軟に対応いただくことができました。幸区道路公園センターには事務局の協働・連携推進課名義で、道路占用許可申請書及び道路占用料免除願を提出することになりました。

地域住民が管理し花植えを行う場合は、「街路樹愛護会」などの団体として手続きをする必要があります、

高木の管理や報告義務が発生するということが分かったことから、活動の「継続性」が一番の課題であると考えました。

まずは今回、行政が実験的に利用し、地域のニーズを把握する。そのうえで継続利用の希望があれば、地域住民や活動団体と利用形態等を検討し、地域の活動場所となることを期待するものです。

さらに、「交通広場」は「地域の方のため」に整備された場所であることから、周辺住民の了承を得る意味で町内会長等に情報提供を行いました。

また、小向防災空地での企画案と同様に、交通広場を訪れた住民同士による間接的なコミュニケーションを築く伝言板を設置するため、メンバーの通う陶芸工房の協力でオリジナル伝言板を作成しました。



オリジナル伝言板の完成！

- ① 3月13日（土）
 - ・オリンピック・パラリンピック推進室のイベントで来場者に土にそのまま埋められるポット（エコポット）に植ええをしてもらうブースを出展する
 - ② ～2週間程度
 - ・芽が成長するまで、鹿島田 DAYS 前で3班と有志の地域住民の方で定期的な水やりを実施する
 - ③ 4月中下旬～5月上旬
 - ・交通広場の雑草抜きイベントなどを実施
 - ・芽の成長具合を確認し、交通広場の花壇にエコポットを植え替える
 - ④ 5月上旬～6月中旬
 - ・開花した花を利用したワークショップ（ポップリヤ押し花など）を開催する
- ※①～④の実施中は、フェイスブックのイベントページ等を活用して情報発信を行う

こうして決定した企画は、イベントを3つのステップで実施し、花の成長を種まきから開花まで地域の方に見守っていただき、つながりづくりを行うものです。

最初の植ええイベントでは、①持ち帰って育てるパターンと、②植ええ後、芽が出てから交通広場に植え替えるパターンの2通りの参加方法を用意することで、参加の幅を広げるように工夫しました。

念願のイベント実現なるか・・・？

しかし、イベント当日は、警報が発令されるほどの豪雨で残念ながら、イベントは中止となりました。

無念の思いでいっぱいでしたが、ありがたいことに岩川さんから鹿島田 DAYS 前のスペースで実施してはどうかという提案をいただき、単独イベントの実施に向けて動き出しました。

単独イベントとなり短期間で効果的な広報を行うため、イベント用に立ち上げたフェイスブックにより周知を行ったほか、幸区の公式インスタグラムや鹿島田 DAYS のインスタグラムの協力を得て、SNSを中心に広報活動をしました。

そして、ついに3月27日（土）に念願の実践イベントを鹿島田 DAYS 前で実施することができました。

イベント当日は天候に非常に恵まれ、10時から12時までの短い時間ではありましたが、散歩中の親子を中心に参加してもらうことができました。



鹿島田 DAYS 前で



多くの親子連れに参加いただいた



鹿島田 DAYS 前の様子

参加者からは、

- ・ベランダではガーデニングに手を出しづらかったけれど、不織布のポットやすぐに芽が出る矢車菊であれば家で育ててみようかな
- ・子どもが植物を育てる機会になれば良いので育ててみたい
- ・持ち帰って育てる環境がないので交通広場で育ててみたい

という声が聞かれました。

鹿島田駅周辺はマンションが多く、ベランダガーデニングに使いやすい不織布ポットも好評でした。

結果として、持ち帰りが15名、交通広場用の種植えが30名弱になりました。

参加者層は、9割が未就学児の子ども連れの親子で、子どもの経験として参加した方が多かったです。

種植えイベントの実施後、交通広場で育てるためのポットは、植え替えのタイミングまで鹿島田 DAYS が水やりの面倒を見てもらえることになり、さらに、種の様子を見に来た参加者が鹿島田 DAYS から貸出してもらったじょうろで水やりをしている様子も見られました。

この間、事務局でも種の成長の様子を確認しながらフェイスブックに近況を発信し、鹿島田 DAYS のインスタグラムでも引き続き共有していただきました。

また、種植えイベントに参加してくれた方々も SNS で「#ひとはなかわさき」のハッシュタグをつけて成長の様子を投稿するなど、少しずつ地域において取組の広がりも見えてきました。

次のステップへ！

種植えをしてからの植物の成長は非常に早く、イベント2日後には芽が出てきました。

一方、交通広場でも雑草が元気に成長しており、次のステップとして雑草抜きを兼ねた交通広場の植え替えイベントを4月24日に実施予定です。



一斉に芽が出てきたポット

また、交通広場への植え替えの前に、周辺町内会へ情報提供を行うため日吉出張所で行われる日吉地区会長会議に出席し取組説明を行いました。

種植えイベント当日に交通広場の位置する鹿島田町内会の会長にイベントの様子を見ていただき企画の趣旨を説明する中で、交通広場の使用にあたっては、①申請手続き等があり、利用が難しいと感じている、②町内会が日常的に管理することは負担である、との意見があり「使いたいけれども使いづらい」ジレンマを抱えていることが分かりました。

植え替えイベントや開花後のワークショップ等で広場の実験的利用を行いつつ、引き続き地域における広場の利用ニーズを調べていきます。



第2弾のイベントチラシ

まとめ

フィールドを「幸区」と決め複数の地域のキーパーソンに話を聞き、いよいよ実践というところで、新型コロナの感染拡大を受けて思うように企画を進めることができない難しさがありました。新川崎タウンカフェなどの地域の活動団体の協力を得て、なんとか鹿島田駅前交通広場での実践につなげることができました。

交通広場での取組はまだ道半ばですが、新型コロナの影響が続く中で、新しい生活様式を踏まえながら工夫を凝らしてチャレンジしていくとともに、住民のニーズや想いを確認し、「地域の居場所」「つながりづくり」の創出に向けて試行錯誤していきたいと思えます。